学芸員 NEWS LETTER

2025.3　立命館大学　文学部　第37号

韓国扶余郡定林寺址の見学実習

目次

- 韓国での遺跡発掘と博物館見学 …… 2
- 大阪歴史博物館での実習を通し自身が学んだこと …… 4
- 学芸員課程報告 …… 7
- 京都国立博物館に勤務して（石田由紀子） …… 8

韓国での遺跡発掘と博物館見学

矢　野　健　一

2024 年 8 月、立命館大学文学部の「考古学実習Ⅲ」の受講生 9 名が大韓民国忠清南道扶余郡市の松菊里遺跡の発掘に参加しました。韓国伝統文化大学校考古学部の李基星教授がこの遺跡の発掘調査を担当されており、その調査に参加しました。松菊里遺跡は韓国の無文土器時代（紀元前 850 ～ 300 年、日本の縄文時代終末から弥生時代初頭に相当）の遺跡です。小高い丘陵上に「松菊里型住居」と呼ばれる住居や 2 本の柱穴が長く並ぶ珍しい遺構などが見つかっており、史跡整備のための発掘が継続しています。韓国での実習は 2015 年度から実施しており、新型コロナウィルス感染症の影響で 2019 年度から中断していましたが、2023 年度から再開しました。

受講生 9 名は 2024 年 8 月 16 日に韓国ソウルに到着し、再建された崇礼門（南大門）を見学、翌 17 日にソウル歴史博物館、公平（コンピョン）都市遺跡博物館、漢陽都城博物館、東大門歴史館を見学しました。18 日にはソウルの景福宮、国立古宮博物館、国立民俗博物館を見学した後、高速バスで扶余に移動し、韓国伝統文化大学校のゲストハウスに宿泊しました。

8 月 19 日の午前中、韓国伝統文化大学校の李基星教授や大学院生の指導のもと、松菊里遺跡の発掘作業に参加しました（写真 1）。午後は韓国伝統文化大学校のキャンパス内の文化財や施設を見学し（写真 2）、隣接するロッテリゾート施設にも足を延ばしました。韓国では気温が高い場合、屋外作業が禁止されるため、午後の発掘作業を実施することができない場合があり、その場合は博物館見学などで代替しました。20 日も午前中は発掘作業に参加しましたが、午後は世界遺産に指定されている陵山里古墳群を見学しました。21・22 日は午前中も屋外作業が禁止されたため、発掘した地層の土から米や粟など栽培された種子を発見する作業に参加しました。土の中からは、ヒスイの玉も見つかることがあり、発掘された実物資料も見学しました。8 月 23 日は李基星教授とともに、扶余国立博物館、世界遺産の定林寺址（写真 3）、およびその近くにある朝王寺を見学した後、ソウルに移動し、帰国しました。

松菊里遺跡の発掘

韓国の松菊里遺跡での発掘は、日本で学んだ発掘の方法と基本的には同じで、使用する機材も基本的には同じです。ただし、細部の形態が少し異なっており、その違いがたいへん面白く感じます。国外での発掘という貴重な経験を通じて、考古学の研究手法が国際的に共通しているこ

韓国伝統文化大学校構内の文化遺産見学

とを実感するとともに、細部における違いを目にすることで、研究や教育のあり方にも多様性があることを確認できました。日本への留学経験のある李基星教授は日本語が堪能で、作業は円滑に進みました。韓国伝統文化大学校の大学院生も日本に興味のある学生で、参加した学生は日本語と覚えたての韓国語を交えて作業を進めていました。

発掘作業以外に、8か所以上の博物館を見学しましたが、どの博物館も展示のデジタル化がかなり進んでいて、デジタル技術を駆使した映像や照明効果を大胆に使用するなど、展示の方法が印象に残りました。ソウルの高層ビルの地下にある公平都市遺跡博物館は、そのビルの建設に先立って発掘された遺跡の遺構面そのものをビルの地下に保存し、遺構面に透明の床を設置し、遺構面の上を歩きながら、その遺跡を見学する博物館です。数㎡程度の範囲で同様の展示を実施している事例は珍しくありませんが、数十m四方の大規模なビルの地下フロアすべてを同様の遺構展示として活用している点、博物館としてみても迫力のある展示です。朝鮮時代から植民地時代にかけての近世・近現代の遺構・遺物の展示は、各国語の解説も充実しており、学生も楽しんでいました。ソウル歴史博物館や扶余国立博物館なども映像展示が充実しており、広い展示室全体の照明の色やスポットライトが切り替わる大胆な展示が印象的でした。

定林寺址

2024年度博物館実習（館園実習）レポート

大阪歴史博物館での実習を通し自身が学んだこと

村田磨美

大阪歴史博物館は、大阪の主要な博物館の１つである。近くには難波宮跡や大阪城があり、歴史を語る上で恵まれた場所に存在している。博物館のつくりは高層ビルで、10階に古代、9階に中世・近世、8階に特集展示室、7階に近代現代フロアといったように時代ごとにフロアを分け展示を行っている。また、難波宮の保存活動によって旧NHK大阪放送局が移転され、大阪歴史博物館の横に建築された関係で、放送局の建物地下にも難波宮跡の遺跡を保存している。このように数々の魅力ある博物館で、8月26日からの5日間の実習に参加した。

実習内容は、主に個人で行うものと、グループで行うものとに分けられる。講義形式の実習は主に個人で学習をし、展示実習やグループワークといった実習は、取り扱う資料に限りがあるため、グループに分かれて活動を行った。1日目、2日目は博物館の施設や遺跡の見学、「資料保存」といった講義形式のものが多く、3日目以降は体験型の活動がメインとなった。使用した資料は多岐にわたり、刀剣といった美術品もあれば、「明王贈豊太閤冊封文」と呼ばれる巻子（レプリカ）、折本や絵葉書、掛軸といった歴史に関するもの、難波宮跡から発掘された土器片といった考古に関するものがあった。

今回の実習で学んだことはいくつかある。1つ目が、学芸員の方の働き方や人柄、展示や保存に対しての姿勢である。以前まで学芸員の方と直接関わる機会がなく、どのような方が働いておられるのかイメージが出来ていなかったが、今回の実習で学芸員の方の自身のイメージが大きく変容した。実習で感じたのは、学芸員の方は気さくな方が多く、コミュニケーション能力が長けているということである。実習の待ち時間には、学生たちの緊張をほぐすべく、ちょっとした会話をしてくださったり、グループワークで困っている時には、積極的に助言をしてくださったりと、こちらに話しかけてくださることも多く、話しやすかった。また、コミュニケーション力という点で、ただ話す能力が優れているだけではなく、言語化能力が極めて高い方々が集まっておられるように感じた。学芸員として働くにあたって、来場者に展示物や展示内容を説明する機会が少なからず出てくる。そこで、来場者の方に理解していただけるよう、難解な資料を分かりやすく説明しなければならない。今回の実習は学生が主に参加していたが、学生でも資料について理解が出来るよう、難しい言葉をかみ砕いて説明されており、学生目線に立った話をされている点に感心した。他に、展示で扱う資料や展示内容にかける思いの深さや、こだわりというものも実習から感じ取れた。3日目の美術品の実習で、ある学生が床に置かれている刀剣の上を跨いでしまうということがあり、学芸員の方に厳しめに注意されていた。この時、跨ぐことによって資料を傷つけてしまう恐れがあることはもちろんのこと、資料に対する敬意が払えていなかったことに対して、学芸員の方が指摘されていたのではないかと考えた。博物館で取り扱う資料は貴重なものが多いが、中には個人から寄贈されたものもあり、刀剣に至っては、個人がコレクションとして集めていたものも展示しているという。御厚意でいただいたものをぞんざいに扱うことは、学芸員として許されない行為であり、資料を取り扱う際には、普段から細心の注意を払って取り組まなければいけないことを知った。また、巻子を取り扱う

実習において、指にささくれがあると資料に血がついてしまう恐れがあるから、指サックをつけるということを聞き、保存という点でも常に気を配っていることが分かった。2つ目に学んだことは、館内での展示方法や展示内容についてである。特に館内は高層ビルというつくりだけに、入念な災害対策が進められていた。例えば、展示台の下には免震台が設置されており、地震が発生した際に起きる横揺れを防ぐつくりになっていた。また、展示台同士の間が狭いと地震が起こった際に来場者が挟まってしまう恐れがある為、台同士の間を空けるといった工夫を行っていた。災害対策の他に、車椅子で来られた方も展示を見ることが出来るよう、一般的な展示台より低めに設置するといった「ユニバーサルデザイン」も意識していることが分かった。数ある展示品の中には写真撮影が禁止されているものがあった。所蔵者の意向や著作権などから写真が撮れないものがあり、展示をする際には、それらの配慮もしなければいけないことを学んだ。

実習中に特に難しく感じたことは、グループワークでの活動である。1日目に展示場所の見学を行い、大阪にゆかりのある展示を考えた。大学も学年も専攻も異なる学生同士でテーマを考える為、初めはお互い打ち解けるのに時間がかかり、グループ内で意見が出しづらい状況となっていた。また、他の博物館ですでに実施されている内容も多く、テーマが被ってしまうことがあった。話し合いの結果、大阪万博が来年に開催されることにちなんで、「1970年大阪万博がもたらしたファッションの変革」という万博とファッションに焦点を当てたテーマに決まった。しかし、万博や昭和期の女性の服装など、自身が知らない分野のことを短時間で調べまとめあげなければならない為、たくさんの苦労をした。だが、自分たちで1からテーマを決め、展示内容や展示方法を考えていく作業はこれまでにない経験であったため、苦しさの反面楽しさもあった。最終日に発表を行い、学芸員の方々からいくつかコメントをいただいたが、作品をただ展示するだけではなく、作品のコンディションにも留意するといった「作品保全」という面を重視出来ていないというご指摘があった。そこで、自分たちが展示したいものを配置するだけではなく、どのように展示をすれば作品が保全出来るかを考慮しなければいけないことを学んだ。

今回の実習で印象に残っているのは、館長のお言葉である。館長は講話の中で、「学芸員は自分の専門分野だけではなく、さらに周辺の文化を知っていなければならない。」と話されていた。学芸員は自身の研究を進めるだけではなく、資料を保存し、常設展・特別展を企画、展示もしなければならない。また、展示をするにあたっても、自身の専攻分野と全く異なるものを取り扱うこともあるという。だが、来場者はそのようなことを知らず、学芸員は何でも知っているという期待を持って質問をしてくる。だからこそ、自身の専攻以外の分野を学び、知識を入れておく必要があるそうだ。その為には、日常から自身の関心の幅を広げ、様々な分野の勉強をすることが大切であるように考えた。また、館長は「展示の資料を理解して展示することが大切である。」とも話されていた。特に、外から企画がやってくるケースも少なからずあり、それに応じて準備をしないといけないこともあるという。展示資料を説明する行為は、学芸員であれば誰もがしなければならず、展示品をよく理解しないまま異なった解釈や読み間違いをしてしまえば、来場者の方に不信感を抱かれてしまう。どのような展示資料に対しても理解が及んでおくように、入念な対策が必要であることも学んだ。

実習先の博物館で、もっとこうした方が良いのではないかと考えたこともある。それは、観光客の誘致である。冒頭でも述べたように、大阪歴史博物館は「大阪城」という観光スポットが近くにあるため、建物周囲には多くの観光客が訪れていた。それにも関わらず、博物館に来る外国人の観光客は少ないように感じた。原因として、大阪歴史博物館の認知がそこまで行き届いていないのではないかと考える。大阪城に視察しに行ったが、観光客は天守閣の中に入るだけで満足して帰っているように思えた。せっかく大阪を訪れているのにも関わらず、

大阪の歴史を学ぶ機会がないのはもったいないことである。大阪歴史博物館も、すでにSNSを利用して観光客向けに宣伝をしているが、それだけでなく、電車の中といった、より多くの人の目につくところに広告を置き、観光客を呼び込んではどうかと考えた。また、博物館の今後の課題として「燻蒸」の問題がある。1日目に燻蒸施設を見学したが、学芸員の方の話によると、館の燻蒸で使用している「燻蒸ガス」が来年で販売停止になるそうだ。今後文化財を保護していくにあたり、どのように対応していくのか気になるところである。

5日間の実習では、学芸員の方をはじめ多くの方にお世話になった。お忙しいところ実習の機会を設けてくださった大阪歴史博物館の職員の方々には大変感謝をしている。この貴重な経験を今後に活かしていきたい。

お　知　ら　せ

・2025年4月採用予定

和田　花
奈良市教育委員会
文学研究科　行動文化情報学専攻　考古学・文化遺産専修2回生

立花　唯翔
七尾市教育委員会
文学研究科　行動文化情報学専攻　考古学・文化遺産専修2024年3月修了

学 芸 員 課 程 報 告

2024 年度博物館実習

大学指定実習館一覧（9 館・10 名）				
地域	施設名	実習期間	日数	人数
京都府	京都市考古資料館	8/27 ～ 8/31	5 日間	1 名
	京都大学総合博物館	8/11、9/2 ～ 9/5	5 日間	1 名
	霊山歴史館	9/3 ～ 9/7	5 日間	1 名
大阪府	大阪府立弥生文化博物館	7/23 ～ 7/27	5 日間	1 名
	大阪歴史博物館	8/26 ～ 8/30	5 日間	1 名
	堺市博物館	7/30 ～ 8/3	5 日間	1 名
	大阪城天守閣	7/29 ～ 8/2	5 日間	1 名
滋賀県	大津市歴史博物館	8/15、8/16、8/21 ～ 8/23	5 日間	2 名
兵庫県	神戸市立博物館	8/6 ～ 8/10	5 日間	1 名

地方実習館一覧（19 館・20 名）				
地域	施設名	実習期間	日数	人数
千葉県	木更津市郷土博物館金のすず	8/20 ～ 8/25	6 日間	1 名
東京都	大田区立郷土博物館	8/20 ～ 8/23、8/27 ～ 8/29	7 日間	1 名
神奈川県	神奈川県立歴史博物館	9/11 ～ 9/13、9/18 ～ 9/20	6 日間	1 名
石川県	石川県立歴史博物館	8/21 ～ 8/23、8/26 ～ 8/28	6 日間	1 名
長野県	野尻湖ナウマンゾウ博物館	8/9 ～ 8/13	5 日間	1 名
静岡県	三島市郷土資料館	8/30、9/1、9/2、9/4 ～ 9/6	6 日間	1 名
愛知県	徳川美術館	11/19、11/28 ～ 12/1	5 日間	1 名
愛知県	刈谷市歴史博物館	8/21 ～ 8/23、8/27、8/28	5 日間	1 名
三重県	三重県総合博物館	8/16 ～ 8/18、8/20、8/21	5 日間	1 名
京都府	野村美術館	7/8 ～ 7/12	5 日間	1 名
京都府	京都鉄道博物館	8/26 ～ 8/30	5 日間	1 名
京都府	京都府京都文化博物館	8/19 ～ 8/23	5 日間	1 名
大阪府	ピースおおさか（大阪国際平和センター）	8/7 ～ 8/9、8/14、8/15	5 日間	1 名
島根県	島根県立古代出雲歴史博物館	8/19 ～ 8/24	6 日間	1 名
島根県	島根県立八雲立つ風土記の丘	8/9 ～ 8/13	5 日間	1 名
広島県	広島県立歴史博物館	8/1 ～ 8/4、8/6、8/7	6 日間	1 名
愛媛県	愛媛県美術館	8/2 ～ 8/5、8/7、8/8	6 日間	1 名
福岡県	九州歴史資料館	8/26 ～ 8/28、8/31、9/2 ～ 9/5	8 日間	1 名
熊本県	熊本博物館	8/21 ～ 8/26	6 日間	2 名

京都国立博物館に勤務して

石田　由紀子（研究員）

京都国立博物館（以下、京博）は明治30年（1897）に開館し、東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館、皇居三の丸尚蔵館とともに日本に5つある国立博物館のひとつです。国立博物館にはそれぞれ設立の経緯があり、それによって収蔵品に特徴があります。京博は、明治初期に廃仏毀釈や近代化の波で荒廃し、遺失の危機に瀕していた寺社の文化財を保護することが設立の目的のひとつでした。そのため、寺社からの寄託品が多いことが特徴です。当館では収蔵品のうち、寄託品が約半数を占め、私が担当する考古・歴史資料も寄託品が多数含まれます。寄託された文化財は、適切な環境のもと保管し、状態の良いものは展示・研究などに活用させていただいています。寺社が考古遺物を所蔵していることは少し不思議に思うかもしませんが、実はけっこうあります。代表的なものは寺社の境内から出土したもので、瓦や経塚遺物、墓誌などがあげられます。なかには縄文土器、弥生時代の銅鐸や古墳時代の須恵器、鏡などもあります。銅鐸は近世以前に偶然掘り出された場合、宝鐸として珍重され、寺社に奉納されることが多かったようです。こういった資料はそのものの重要性もさることながら、出土した経緯や伝来、背景も大切な歴史となります。

私自身のことを少しお話しますと、本学で考古学を専攻し、京博に来る前は奈良文化財研究所（以下、奈文研）に勤務していました。主に平城宮や藤原宮、その周辺の寺院の発掘調査を担当し、配属された瓦の研究室で瓦の整理・調査研究をしていました。発掘から出土した大量の瓦と向き合う仕事は、自身の性分にとても合っていて、充実した日々を過ごすことができました。その後、同じ奈文研の組織である飛鳥資料館に1年勤務し、令和4年（2022）に同じ国立文化財機構の組織である京博に異動となりました。

実は京博は、学生時代に学芸員実習をさせてもらったところです。実習時はちょうど新収蔵品展の準備の最中でした。さすがに実物の資料を取り扱うことはできませんでしたが、伝愛媛県内出土の銅矛の題箋作りを手伝わせてもらったことは鮮明に覚えています。ちょうど就職氷河期でもあり、埋蔵文化財の発掘調査員など、考古学の職に就くのも大変で（実際非常勤は7年やっていました）、とても学芸員になれると思っていませんでした。その後、縁あって京博に赴任することになり、弥生時代の青銅器の特集展示でその時の伝愛媛県の銅矛を今度は自分が展示することになりました。人の縁は不思議なものと言いますが、文化財との縁もまた不思議なものです。少しでも多くの人と文化財の縁をつなぐために、なるべく多くの資料が人の目に触れるよう、展示や整理・調査を進め、良い状態で次の世代に伝えていきたいと思っています。

京博での業務に話を戻します。私は学芸部に所属し、考古室と企画室を兼務しています。考古室では考古資料のほか、歴史資料も取り扱っています。京博は大きな博物館ですが、基本一分野に担当は一人という構成で、保管・展示・修理・収集・貸出・研究といった博物館の業務を一人で担うことになります。幸い考古は再任用の大先輩が二人いるので、さまざまな博物館業務について相談しながら仕事を進めています。展示に関しては、京博は現在、特別展と名品ギャラリー（平常展）を平成知新館と呼ばれる建物で交互に展示しています。名品ギャラリーでは、通史的な日本の考古資料の展示だけでなく、テーマ展示を都度設定しています。テーマ展示・通史展示ともに、できるだけ多くの資料に日の目を当てて、その魅力を伝えたいと知恵を絞っています。

京都国立博物館　平成知新館

名品ギャラリー（考古）の展示風景

いっぽう、企画室は展覧会を滞りなく開催することが業務です。企画室の業務は、広報、図録・題箋などの文書校正、展示ケースやディスプレイの制作・管理、展示作業の人員配置、展示スケジュールの管理など多岐にわたります。京博は常にいろいろな展示やイベントが同時並行で進行しています。ですので、企画室の仕事の全体像を把握するのもとても大変で、まだまだ修行中といったところです。企画室をはじめとする博物館の業務については、京博のHPにある「グレゴリ青山の深掘り！京博さんぽ」で紹介していますので、興味のある方はご覧ください。

長年の発掘調査業務を経て、博物館は飛鳥資料館、京博と2館を経験しました。博物館については前者が飛鳥時代の考古資料に特化した博物館、後者が日本美術を中心とした比較的大規模な博物館です。それぞれ役割や業務、仕事の進め方は異なりますが、いずれも資料は時を超えて伝わったもので、その背後には人がいます。いろんな人の手を経て、今ここにある資料のことをもっと知りたい、この気持ちは学生時代に初めて考古資料に触れたときから変わっていません。今の私は、いわば資料に育ててもらったようなもので、今度はその重要性や魅力を多くの人に伝え、次の世代にバトンをつなぎたいと思っています。

2004年　立命館大学大学院文学研究科日本史学専修博士前期課程修了

学芸員 NEWS LETTER

第37号　2025年3月発行
立命館大学　文学部　NEWS LETTER　編集委員会　編集発行
〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1　立命館大学文学部事務室
TEL（075）465-8187（直通）
letters@st.ritsumei.ac.jp